

# 論 説 報 告

第27卷第7號 昭和16年7月

## 鐵筋コンクリート橋の構造に関する實驗的研究

准會員 一木 保夫\*

**要旨** 鐵筋コンクリート桁の可動支承として、從來の鋼構造に代る鐵筋コンクリート橋承に就き、主として模型試験により、對稱断面に於ける水平方向引張應力の分布状態、配筋方法の影響、接觸面承鉄の影響等に關して試験研究を行ひ、その結果を實際に應用して荷重 100t に耐ふべき橋承を設計し、之に就き載荷試験を行ひ、設計荷重に對し十分なる安全率を有することを見出しつて模型試験の結果を實證し、以て鐵筋コンクリート橋承の設計基準を求めたのである。

### 目 次

- |                           |                                       |
|---------------------------|---------------------------------------|
| 1. 總 説                    | 4. 接觸面附近に於けるコンクリートの許容支壓應力度並びに接觸面承鉄の影響 |
| 2. 設計理論に關する既往の研究          | (1) 接觸面附近に於けるコンクリートの許容支壓應力度           |
| (1) Hertz の研究             | (2) 接觸面承鉄の影響                          |
| (2) Krüger の研究            | 5. 試験橋承の設計並びに其の設計荷重に對する安全率            |
| (3) Mörsch の研究            | (1) 設 計                               |
| (4) Krebitz の研究           | (2) 供試體の製作及び養生                        |
| (5) Faeber の研究            | (3) 載荷試験                              |
| (6) Freudenthal の研究       | (4) 設計荷重に對する安全率                       |
| (7) Bortsch の研究           | (5) 接觸面承鉄の影響                          |
| (8) 之等の設計理論に關する考察         | (6) 試験結果の要約                           |
| 3. 對稱断面に於ける水平方向引張應力の分布並びに | 6. 結 言                                |
| 之に基く配筋方法                  |                                       |
| (1) 橋承内部に於ける應力の分布         |                                       |
| (2) 對稱断面に於ける水平方向引張應力の分布   |                                       |
| (3) 配筋方法の影響               |                                       |

### 1. 總 説

中徑間以上の鐵筋コンクリート桁の可動支承として、從來は鑄鋼製構造を採用して來たのであるが、現下非常時局の逼迫せる鐵鋼材節減の要求により、之に代る適當なる材料を選択使用すべきことは、急を要する頗る重大な問題となつた。

獨逸に於ては數年來天然石を以て造れる橋承に就き處々にて試験研究が行はれ、獨逸道路局は 1937 年 7 月の告示によつて、小徑間或は中徑間鐵筋コンクリート道路橋の可動支承として天然石橋承を使用すべきことを推奨した。その後國營自動車専用道路の橋梁新設工事に於て、特殊構造による花崗岩橋承を使用し、頗る良好な結果を見てゐる。

併しながら、橋承として天然石を使用するに當つては、其の石材選擇に際し種々の條件が要求され、大塊の天然石を得るには其の價格が非常に高價であり、且つ橋承として最も重要な部分たる接觸面の仕上げも相當困難を伴ひ、從つて經濟的に之を使用することは難しいものと思はれる。更に又、我が國の如き地震國に於ては地震時の危険も頗る大きい。

之等の點より、更に經濟的で又地震に對しても安全なるものとして、當然鐵筋コンクリートによる橋承を使用すべきことが考へられ、我國に於ても其の使用が目下漸次普及せんとしつゝあり、既に相當多くの橋梁工事に於

\* 内務技師 工學士 内務省土木試験所

て其の實例を見てある狀態である。

然るに未だ之に關する信頼し得る設計基準なく、實驗例も少いために、各所に於て使用し居る實例を見るに、構造は區々であり、其の安全度も十分ならざるものあり、頗る不安心な現状である。

鐵筋コンクリート 摆承の設計に當つては、現在では主として、簡単であると云ふ點から Krieger 及び Mörsch による設計方法が採用されてゐるが、之等の方法では對稱斷面に於ける水平方向の引張應力の分布を拋物線狀に假定してゐるために、接觸面に厚い承鉗を使用した場合以外は、實際とあまりよく一致しない。而も接觸面に厚い承鉗を使用することは、從來の鋼構造に代つて鐵筋コンクリート 摆承を使用せんとする本來の主旨に反するものである。

かゝる現狀に鑑み、著者は内務省土木試験所に於て、各地工事現場よりの依頼に係る鐵筋コンクリート 摆承に就き壓縮試験を行ふと共に、揆承に關する既往の研究の調査を行ひ、更に進んで高さ 30 cm の模型揆承により、對稱斷面に於ける水平方向引張應力の分布狀態、配筋方法の影響、接觸面承鉗の影響等に關して試験研究を行ひ、その結果を實際に應用して荷重 100 t に耐ふべき揆承を設計し、之に就き載荷試験を行ひ、設計荷重に對し十分なる安全率を有することを見出で模型試験の結果を實證し、以て鐵筋コンクリート 摆承の合理的な設計基準を求めたのである。之等の調査及び試験の結果は、「土木試験所報告」<sup>1)</sup> に詳細に報告し、更に研究を進めつゝあるが、現在までの研究を一括して茲に發表し諸賢の御批判を乞ふ次第である。

## 2. 設計理論に關する既往の研究

鐵筋コンクリート 摆承の設計理論に關しては、石鉗、コンクリート鉗或は鐵筋コンクリート鉗と同様に考へることが出来るが、要するに問題となるのは接觸面に於ける壓縮應力と、縱方向の壓縮によつて誘起される横方向の引張應力であつて、之等に關しては從來主として獨逸に於て研究され、Köpke, Barkhausen, Hertz, Krieger, Mörsch, Krebitz, Faeber, Bietigk, Freudenthal, Bortsch 等の實驗的研究或は近似的假定のもとに誘導せる算式等がある。この内主なるものに就き次に簡単に記述する。

### (1) Hertz の研究

Hertz は 2 つの彈性體が接觸し、之によつて一方の物體から他方の物體に壓力が傳はる場合の該接觸面の幅、變形及び應力分布狀態に關する問題を取扱ひ、Hertz の理論として有名な式次を與へてゐる。

即ち 2 つの圓錐形彈性體が接觸する場合

$$b = 4 \sqrt{\frac{P}{\pi l} \cdot \frac{\frac{1}{E_1} \left(1 - \frac{1}{m_1^2}\right) + \frac{1}{E_2} \left(1 - \frac{1}{m_2^2}\right)}{\frac{1}{r_1} + \frac{1}{r_2}}}$$

$$\sigma = \frac{4P}{\pi b l}$$

茲に  $b$ =接觸面の幅

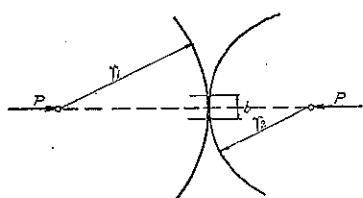
$\sigma$ =接觸面の中央に生ずる最大壓縮應力度

$P$ =傳達さるべき壓力

$l$ =彈性體の接觸する長さ

$E_1, E_2$ =ヤング係数

圖-1. 2 圓錐形彈性體の接觸



1) 著者，“鐵筋コンクリート揆承に關する壓縮強度試験”，土木試験所報告第 45 號

著者，“鐵筋コンクリートロツカーレの形狀並びに配筋に關する實驗的研究”，土木試験所報告第 51 號

著者，“鐵筋コンクリートロツカーレの設計並びにその設計荷重に對する安全性に就て”，土木試験所報告第 56 號

2) Emperger, Handbuch für Eisenbetonbau, Bd. VII.

$m_1, m_2 = \text{ボアソン数}$

$r_1, r_2 = \text{接觸する圓錐面の半径 (図-1)}$

今  $E_1 = E_2 = E, m_1 = m_2 = m$  とすれば

$$b = 4 \sqrt{\frac{2P\left(1 - \frac{1}{m}\right)}{\pi l E \left(\frac{1}{r_1} + \frac{1}{r_2}\right)}}$$

となる。

尙 Köpke 及び Barkhausen も共に接觸面に於ける最大圧縮應力度及び接觸面の幅に関する問題を取扱つてゐる。

併し、コンクリートや石材の様な脆性材料を使用せる鉄或は橋承に起る最初の破壊現象は、その接觸面の破壊ではなく、内部に生ずる縦の亀裂であるから、之等の式は接觸面の半径を決定する場合とか、接觸部分の幅を計算する場合とか、接觸部分の應力を計算する様な場合にのみ使用される。

#### (2) Krüger の研究<sup>3)</sup>

Krüger は實驗結果に基いて、鉄の對稱断面に作用する壓縮方向に直角な横方向の全引張力  $Z$  を  $Z = 0.28P$  で與へ、之を圖-2 の如く抛物線状に分布するものと假定してゐる。但し長さは單位長をとる。

#### (3) Mörsch の研究<sup>4)</sup>

Mörsch は甚だ任意的假定のもとに出發して、力の平衡條件より、鉄の對稱断面に作用する横方向の全引張力  $Z$  に對し、 $Z = P(a - b)/4h$  なる式を與へてゐる。但し長さは單位長さをとる。 $Z$  の分布状態に關しては、Krüger と同様に抛物線状に分布するものと假定してゐる(圖-2)。 図-2. Krüger 及び Mörsch による全引張力  $Z$

Krüger 及び Mörsch の如く  $Z$  の分布を抛物線状と假定すれば、最大引張應力度  $\sigma_Z$  は、 $\sigma_Z = 3/2 \cdot Z/h = 1.5\sigma_{0Z}$  となる。但し之を橋承に適用する場合には、兩端の  $P$  による影響を組合せて考へることが必要であり、結局橋承全體の引張應力度分布状態は 2 つの抛物線の一部分重なり合つたもので表はされる。たゞこの場合、 $h$  のとり方、即ち片側の  $P$  による影響をどの點まで考へるかは甚だ不明瞭であるが、大略  $(1.0 \sim 1.2)a$  位にとつてよいと考へられる。

#### (4) Krebitz の研究<sup>5)</sup>

Krebitz は縦の亀裂が引張應力によつてではなく、引張歪によつて起るものと考へ、一般の彈性理論から出發して、Krüger 或は Mörsch の様に不確実な引張強度を基準とせずに、壓縮強度を基準として安全度を判断する次の公式を誘導した。

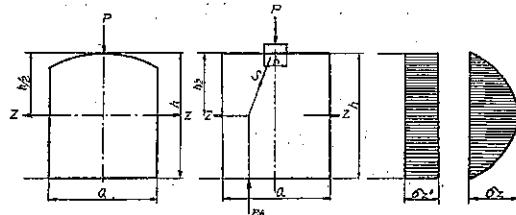
即ち圓錐面接觸の場合は

$$\sigma_m = \frac{\sigma_0}{1.06 + 0.033 \frac{l - \delta}{l\delta} \sqrt{\frac{l^2}{l\delta}}}$$

但し  $\sigma_m = \text{引張歪による破壊の基準となる圧縮應力度}$

$\sigma_0 = \text{Hertz による接觸面の最大圧縮應力度}$

$\delta = \text{Hertz による接觸面の幅}$



3) Deutsche Bauzeitung, 1926

4) E. Mörsch, "Über die Berechnung der Gelenkquader", B. u. E., 1924, Heft 12.

5) Josef Krebitz, "Wälzgelenke aus Beton oder Stein", B. u. E., 1926, Heft 5.

$t$  及び  $d = \text{図-3}$  に示す如く夫々高さ及び幅  
又幅  $\delta$  なる平面で接觸する場合には

$$\sigma_m = \frac{\sigma_0}{1.30 + 0.02 \frac{d-\delta}{\delta} \sqrt{\frac{d^2}{t^2} - 0.30} \left(\frac{\delta}{d}\right)^2}$$

鐵筋を挿入した場合には、鐵筋の断面積を  $f_e$ ,  $f_c$  の影響するコンクリートの面積を  $f_b$ , 鐵筋とコンクリートとのヤング係数の比を  $n$  とすれば、圓盤面接觸と幅  $\delta$  なる平面接觸との夫々の場合に對し

$$\sigma_m = \frac{\sigma_0}{(1.06 + 0.033 \frac{d-\delta}{\delta} \sqrt{\frac{d^2}{t^2}}) \left(1 + n \frac{f_e}{f_b}\right)}$$

及び

$$\sigma_m = \frac{\sigma_0}{[1.30 + 0.02 \frac{d-\delta}{\delta} \sqrt{\frac{d^2}{t^2}} - 0.3 \left(\frac{\delta}{d}\right)^2] \left(1 + n \frac{f_e}{f_b}\right)}$$

以上の式は最初一般の弾性理論から出発したにも拘はらず、最後の結果に到達する途中に於て、多數の任意的な假定を設けたので、聊か龍頭蛇尾の觀がある。

図-3. Krebitz の研究

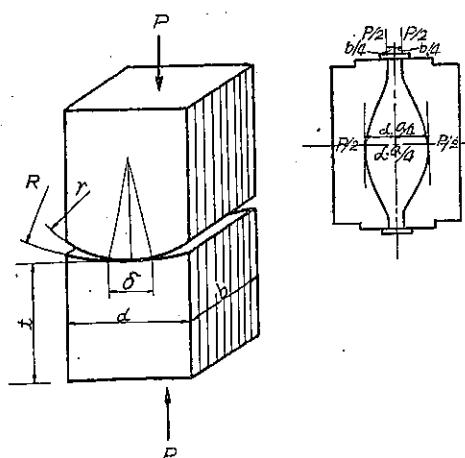
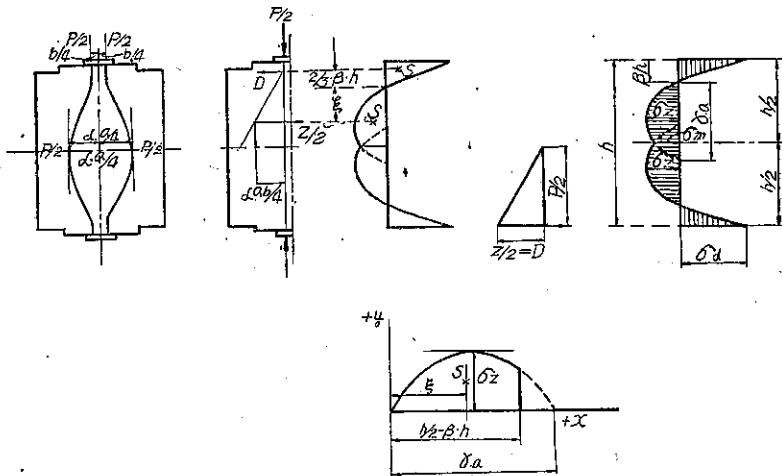


図-4. Faeber の研究



#### (5) Faeber の研究<sup>6)</sup>

Faeber は橋承の對稱斷面に於ける水平方向の最大引張應力度  $\sigma_x$  に關し、Mörsch と同様な方法で研究を進め、近似的假定のもとに次の式を與へてある（図-4）。

$$\frac{\sigma_x}{\gamma_a h^2} \left( \frac{1}{2} - \beta \right)^2 \left[ 1 - \frac{2h}{3\gamma_a} \left( \frac{1}{2} - \beta \right) \right] = \frac{3P(\alpha - b)}{16(3\zeta + 2\beta h)}$$

茲に  $\alpha$ ,  $\beta$ ,  $\gamma$  は橋承の寸法によつて異なる係數である。

#### (6) Freudenthal の研究<sup>7)</sup>

Freudenthal は鉄の内部の應力分布状態に關して研究を進め、對稱斷面に於ける横方向の引張應力  $\sigma_x$  の値に對し次の式を誘導した（図-5）。

$$\begin{aligned} \sigma_x = & \frac{5P}{4\pi b} [-\varphi(1+3\cot^2\varphi)+3\cot\varphi]+\frac{2Pb^2}{\pi} \left[ \frac{1}{2(4+i^2)d} + \frac{d^2(d-y)}{\{i^2d^2+(d-y)^2\}^2} \right. \\ & \left. + \frac{d^2(d+y)}{\{i^2d^2+(d+y)^2\}^2} \right] - 4\alpha i^4 d^4 (d^2 - 3y^2) \end{aligned}$$

(6) Julius Faeber, "Das Eisenbeton-Pendellager", Der Bauing., 1928. Heft 43.

(7) A. Freudenthal, "Beitrag zur Berechnung von Wälzgelenken aus Beton und Stein", B. u. E., 1933. Heft 9 u. Heft 10.

$$\text{但し } \alpha = \frac{105}{64\pi} \cdot \frac{P}{d^2} \cdot \frac{\frac{3}{4} i^2 \ln \left( 1 + \frac{4}{i^2} \right) - \frac{3}{2} i \arccot \frac{3}{i} + \frac{2}{4+i^2}}{1 + \frac{4}{7} i^2 + i^4}$$

この解法も勿論一つの近似解法に過ぎないが、鉄の内部の応力状態に關する限り、これまでのものよりも確かに厳密に近いものである。尙ほこの Freudenthal の解法に就いては、「土木學會誌」第 19 卷第 9 號に福田武雄氏が「コンクリート或は石材の鉄の解法」として紹介しておられるので、詳細は同文を參照されたい。

#### (7) Bortsch の研究<sup>8)</sup>

Graz 大學教授 Bortsch は、彈性理論から出發して之に實驗の結果を加へ、對稱断面に於ける引張應力  $\sigma_x$  の分布状態を簡単な方法で直線を以て描き、之より圖式的に鐵筋の配置を定める方法を發表してゐる。

Bortsch の解法に就いては「土木學會誌」第 25 卷第 3 號及び第 6 號に抄譯しておいたので、詳細は同文を參照されたい。次に簡単にその方法のみについて記する。

今圖-6 に示す如き單位長の鉄を考へ、之に荷重  $P$  が  $b$  なる幅に  $p = p_1 \cos \frac{\pi x}{b}$  に分布して働くものと考へる (Hertz の理論に於ては橢圓状に分布するものと假定してある。(1) Hertz の研究参照)。鉄の幅を  $a$ ,  $b/a = \beta$  とする。然るときは對稱断面に於ける  $\sigma_x$  の分布状態を示す圖を圖-7 の如くして描くことが出来る。

$y/a = 1$  なる A 點と  $\sigma_x = 0.6 I/a$  なる B 點とを結ぶ。この直線と  $y/a = 0.6$  に於ける水平線との交點を C とする。 $y/a = 1$  に於て  $\sigma_x = 0.05 P/a$  をとり、かくして D 點

が求まる。一方  $y/a = 1.7$  の點を E とする。線 BCDE は  $\beta$  には無關係である。O より下方  $y/a = \frac{\beta}{4}(5 - 13\beta)$  にて F 點が求まり、 $(0.6 - 0.9\beta + 2\beta^2)P/a$  なる距離をおいて  $y/a$  軸に平行なる線が G 點を決定する。線 FGCDE と  $y/a$  軸とによつて囲まれた面積が、鐵筋によつてとらるべき引張力を表すことになる。

さて次にこの引張應力圖によつて鐵筋の配置を決定する方法を、數値計算例によつて説明する。

$R = 2.15 \text{ m}$ ,  $r = 1.70 \text{ m}$ ,  $E_b = 250,000 \text{ kg/cm}^2$ ,  $a = 57 \text{ cm}$ , 橋梁の幅の方向即ち鉄の長さ 1cm 當りに働く力  $P = 1746 \text{ kg}$  とする。Hertz の式により  $b = 7.45 \text{ cm}$ , 又  $p_1 = 298 \text{ kg/cm}^2$ ,  $\beta = b/a = 0.131$ ,  $P/a = 30.65 \text{ kg/cm}$  である。

前述の方法によつて、鉄の軸に於ける長さ 1cm 當りの引張應力  $\sigma_x$  は圖-8 (a) の如くになる。引張應力圖の面積は  $450 \text{ kg/cm}$  となり、從つて  $Z/P = 450/1746 = 0.258$  となる。今鐵筋を橋梁の幅の方向に 15cm 間隔に入れるものとすれば、一つの断面に於て鐵筋によつてとらるべき全引張應力は  $15 \times 450 = 6750 \text{ kg}$  となる。この

圖-5. Freudenthal による横方向引張應力  $\sigma_x$   
( $P$  は抛物線状に分布するものと假定する)

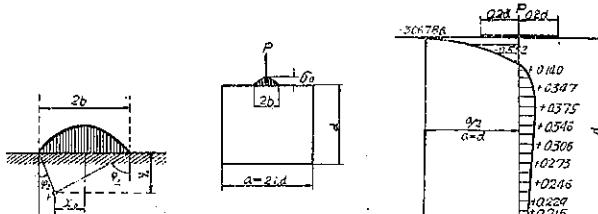


圖-6. コンクリート鉄

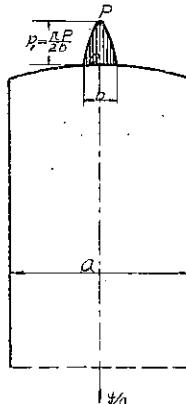
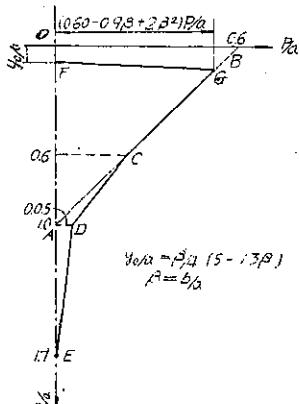


圖-7. Bortsch による  
對稱断面の  $\sigma_x$  の  
分布状態



8) R. Bortsch, "Wälzgelenke und Stelzenlager aus Eisenbeton", B. u. E., 1938. Heft 19 u. Heft 20.

力の分配は図-8 (b) の如き方法による。

鉄筋間隔を  $e$ 、鉄筋断面積を  $f_e$ 、鉄筋の許容應力度  $\sigma_e = 800 \text{ kg/cm}^2$  とする ( $\sigma_c = 1200 \text{ kg/cm}^2$  とせず  $\sigma_c = 800 \text{ kg/cm}^2$  をとつた理由に就いては後に説明する)。

$$\text{然るときは } e \cdot 15\sigma_x = f_e \sigma_e$$

$$\text{故に } e = \frac{f_e \sigma_e}{15\sigma_x}$$

$\phi 14 \text{ mm}$  に対する  $f_e = 1.54 \text{ cm}^2$  なる故に

$$e = \frac{1.54 \times 800}{15\sigma_x} = \frac{82.1}{\sigma_x}$$

$\sigma_x$  の種々の値に対し  $e$  を計算して、1つの直線の上下にこの半分づゝをとり、之によつて2つの對稱的曲線が得られる。この2つの曲線の間に  $45^\circ$  の斜線を引いて行くと鉄筋の位置が求まる(図-8 (c))。轉動面からかなり離れた軸上の點に於ては、 $e$  が非常に大きくなるから鉄筋の直徑を變へ  $\phi 8 \text{ mm} = 0.502 \text{ cm}^2$  を用ふる。然るときは

$$e = \frac{0.502 \times 800}{15\sigma_x} = \frac{26.77}{\sigma_x}$$

となりて之により又別の曲線が得られ、同様にして鉄筋の位置が決定される。

鉄筋の間隔が最も密になる點は、自ら引張應力  $\sigma_x$  が最大の點であつて、之は轉動面から  $y = 12 \text{ cm}$  離れた點である。参考のために之と比較して図-8 (d) に Mörsch の方法による鉄筋配置を示すが、之に於ては鉄筋間隔の最も密な點は、高さの約  $1/2$  即ち  $y = 28 \text{ cm}$  のところである。

更に Bortsch は龜裂が入つた場合の無筋及び鉄筋コンクリート鉄に就いて研究を進め、龜裂が入つた場合には鉄筋は前述の計算によるよりも 50% も大なる應力に抵抗しなければならないことを見出し、そのために鉄筋の許容應力度としては普通一般に用ひられてゐる  $1200 \text{ kg/cm}^2$  の代りに、之より小なる  $800 \sim 1000 \text{ kg/cm}^2$  程度にとることが必要であることを述べてゐる。

橋承に於ける應力の計算も鉄に於けると全く同様であるが、たゞ橋承の場合には、兩端に働く各々の荷重によつて生ずる2つの應力曲線が合さつたものとなる。即ち図-9 に示す如き、高さの  $1/2$  のところに最小の  $\sigma_x$  をもつた對稱な應力曲線を得る。鉄筋の配置も図-8 の場合と全く同様にして決定される。

#### (8) 之等の設計理論に関する考察

以上が今日までに發表されてゐる主なる計算方法の大略であるが、現在では之等の内最も簡単であると云ふ點から、Krüger 及び Mörsch の方法が最も多く使用されてゐる。併し後に述べる如く、著者の行つた實験の結果から、Krüger 及び Mörsch の方法は接觸面に厚い承鉢を使用した場合以外は實際とあまりよく一致せず、之に

図-8. 數値計算例

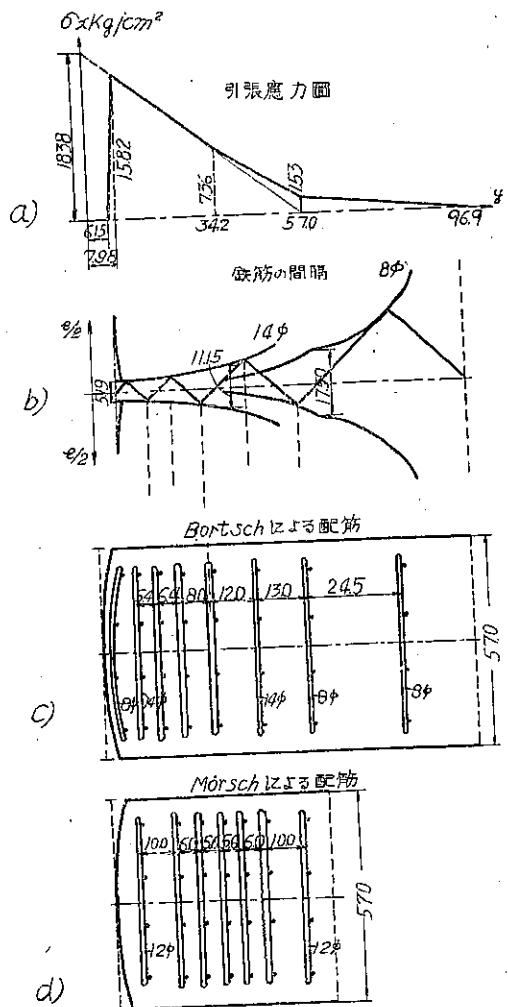
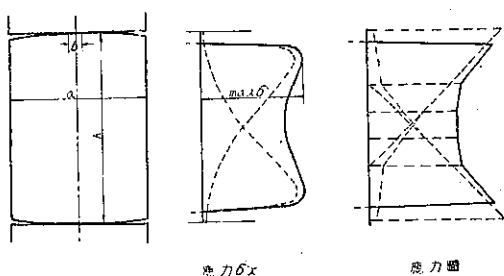


図-9. 橋承に於ける  $\sigma_x$  分布圖



応力曲線

對して Bortsch の方法が普通の場合に對し比較的よく實際と一致し、又この方法によつて鐵筋の計算を行つた橋承が十分大なる強さを有することが明らかになつた。

Bortsch の方法によれば、Krüger 或は Mörsch の方法によるよりも荷重の作用點に近い部分で最大の引張應力を生じ、從つてその部分で鐵筋の間隔が最も密になるわけである。

尙この外、Krebitz とか Freudenthal の方法は、理論としては比較的厳格なものであるが、式の形が複雑であるために、實際設計に使用するには不便である。

### 3. 對稱斷面に於ける水平方向引張應力の分布並びに之に基く配筋方法

#### (1) 橋承内部に於ける應力の分布

橋承内部に於ける應力の分布状態を推知するために、寫真-1 に見る如き幅 50 cm、高 100 cm、長 50 cm の 1:2:4 無筋コンクリート橋承供試體を作製し、表面に圖-10 に見る如く 13 個の測點を設け、鉛直に載荷して各測點に於ける水平、鉛直及び左右 45° の 4 方向の歪を Huggenberger 歪測定器（精度 1/1000 μm）により測定し、之より彈性計算により主應力の大きさ並びに方向を求めた。計算に當つて、コンクリートのヤング係数  $E$  及びボアソン數  $m$  は、 $E = 21000 \text{ kg/cm}^2$ 、 $m = 0.2$  と假定した。この様に  $E$  及び  $m$  を假定し、完全彈性體に關する理論をそのまま應用したのであるから、勿論計算によつて得られた値が實際に生じてゐた應力と幾分相違することは免れないが、併し應力分布の大體の傾向を知るには十分である。

斯くして求めた載荷 50 t の場合の主應力の方向及び大きさは、圖-10 に示す如くである。（+）は引張應力、（-）は壓縮應力を示す。最大の壓縮及び引張應力は鉛直方向の對稱斷面に生じ、夫等の大きさは載荷點より高さの中心に近づくにつれて減少してゐる。

材料約半年で破壊試験を行つた結果、寫真-2 に見る如く中央に縱の龜裂を生じて 2 つに裂けた。145 t にて載荷點附近に初龜裂を生じ、破壊荷重は 165 t であった。寫真-2 に水平に 2 條の黒線が見えるのは、破壊時の危険を防ぐため豫め

緩く結つておいたロープである。

各地の橋梁工事現場より依頼の鐵筋コンクリート橋承供試體に就いて試験せる結果は、應力の分布状態に關しては無筋の場合と略々同様な傾向を示し、破壊試験の際の龜裂の發生状態は、何れも載荷點の近くに生じた初龜裂が數條の縱の龜裂となつて進展し、然も主なる龜裂は中央に近い

寫真-1. 歪測定用無筋コンクリート橋承供試體

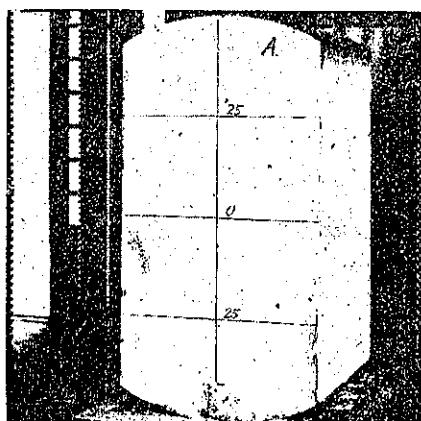
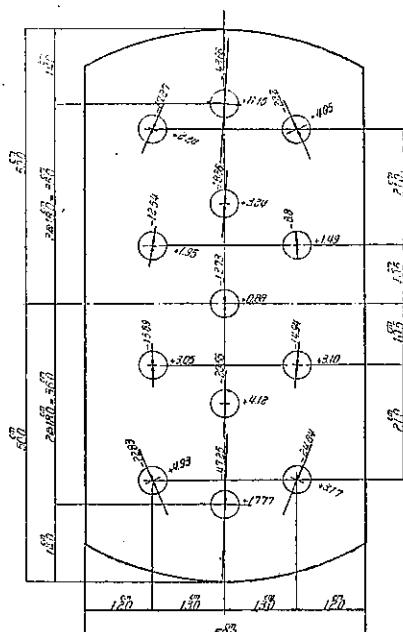


圖-10. 載荷 50 t の場合の主應力の方向及び大きさ ( $\text{kg}/\text{cm}^2$ )



寫真-2. 無筋コンクリート橋承供試體の破壊状態



縦の鉄筋に沿ふて生じた。

以上述べた應力の分布状態及び破裂の発生状態より明らかなる如く、橋承の破壊は縦方向の圧縮によつて誘起される横方向の引張應力によるものであるから、之に對して十分なる鉄筋を挿入する必要がある。

## (2) 對稱断面に於ける水平方向引張應力の分布

橋承の鉛直對稱断面に於ける水平方向引張應力の分布状態を明らかにせんがために、圖-11 の如き幅 15 cm、高 30 cm、長 15 cm の横型の 1:1.5:3 無筋コンクリート橋承供試體を作製し、その表面の對稱断面上に 7 個の測定を設け、鉛直に載荷せる場合の之等の測點に於ける歪を測定し、之より計算によつて水平方向引張應力の大きさを求めた結果は圖-12 の如くである。但しこの場合は、對稱断面であるから、主應力の方向は鉛直及び水平であり、左右  $45^\circ$  の方向の歪は等量であるものと假定して、歪の測定は鉛直及び水平の 2 方向のみに止めた。又コンクリートのヤング係数  $E$  及びボアソン數  $m$  は、前と同様に  $E=210000 \text{ kg/cm}^2$ ,  $m=6$  と假定して計算を行つた。

圖-12 を見るに、 $\sigma_x$  の分布は兩端にて大きく中心に近づくにつれて小さくなつてゐて、Krüger 或は Mörsch の假定してゐる様な抛物線状の分布とは全く異なつてゐる。

今この實測値と Bortsch の方法により計算せる値とを比較してみると、圖-13 及び圖-14 の如くであり、兩者が良く合致することがわかる。たゞ荷重の作用點に近い部分では實測値の方が幾分大きな値を示してゐる。

即ち接觸面に承鉢を有しない場合には、Bortsch の方法によつて計算した値が非常によく實際と合致することがわかる。承鉢を有する場合には、水平引張應力の分布状態が變り、厚い承鉢を使用した場合には Krüger 或は Mörsch の假定してゐる様な抛物線に近い形を示すことが實驗によつて確かめられたが、實際に於てこの様な厚い承鉢を使用することは、從來の鋼構造に代つて鐵筋コンクリート橋承を使用せんとする本來の主旨に反するも

圖-12. 水平引張應力  $\sigma_{xz}$  の實測値

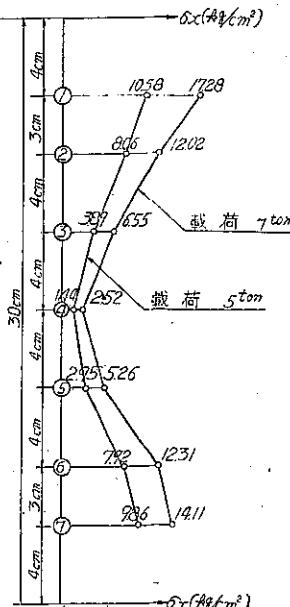


圖-13. 水平引張應力  $\sigma_xz$  の實測値と Bortsch の方法により計算せる値との比較（載荷 5 t）

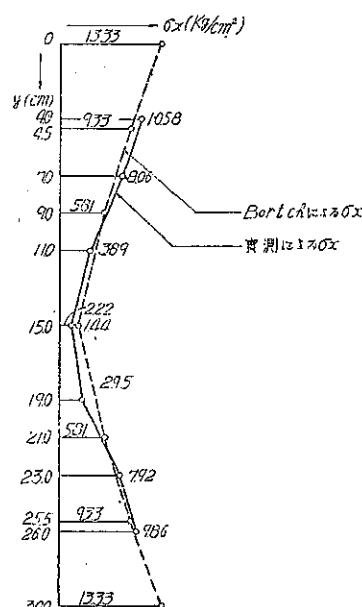
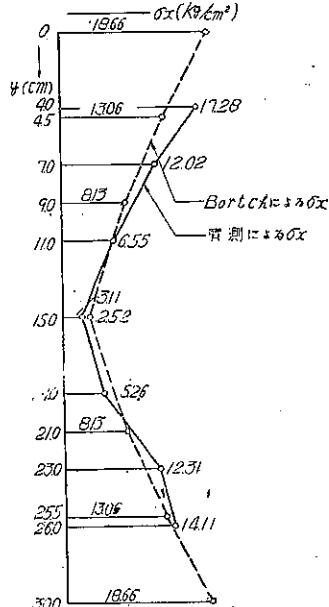


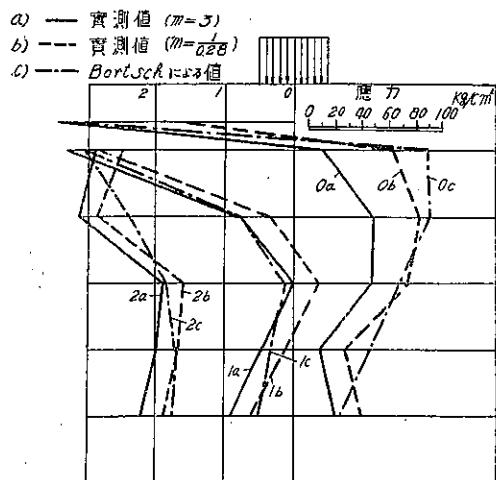
圖-14. 水平引張應力  $\sigma_xz$  の實測値と Bortsch の方法により計算せる値との比較（載荷 7 t）



のであり、又厚い承板を使用しなければならぬ理由は少しもないである。普通の薄い承板を使用した場合にも Bortsch の方法によつて計算を行へば、實際とは幾分相違するがその差は安全側にあると云ふことが出来る。

尙 Bortsch の方法が實際と良く合ふと云ふことに就いては、Hannover の工業大學に於て、供試體として鋼板を用ひて行つた實驗によつても證據立てられてゐる<sup>9)</sup>(圖-15)。

圖-15. 水平引張應力  $\sigma_x$  の實測値と Bortsch の方法により計算せる値との比較 (Hannover の工業大學にて行つた實驗による)



### (3) 配筋方法の影響

形狀の影響、接觸面承板の影響及び配筋方法の影響

を見出さんため、圖-16 の如き高さ 30 cm の 12 種の模型橋承供試體に就き比較試験を行つた。I ~ IV は無筋のもの、V, VI は Bortsch の方法によつて鐵筋を入れたもの、VII, VIII は一重の螺旋鐵筋を入れたもの、IX ~ XII は二重の螺旋鐵筋を組合せて入れたものである。鐵筋としては 8~12 番鐵線を使用した。

比較試験の結果は圖-17 の如くで、之より次の結論を得た。

形に關しては、III 又は IV は I 又は II より夫々強さは僅か大であつたが、IV の様な形とすれば最も大きな引張應力を受ける部分の鐵筋の長さが最も短くなつて不合理であるから、結局 II の様な形を標準型として採用すべきである。

接觸面承板の影響に關しては、承板を取付けることによつて強さは増加した。例へば V と VI とを比較するに、VI は V よりも龜裂荷重は 26%、破壊荷重は 9% 増加してゐる。又無筋のもの I と II を比較するに、II は I よりも龜

圖-16. 模型橋承供試體の種類

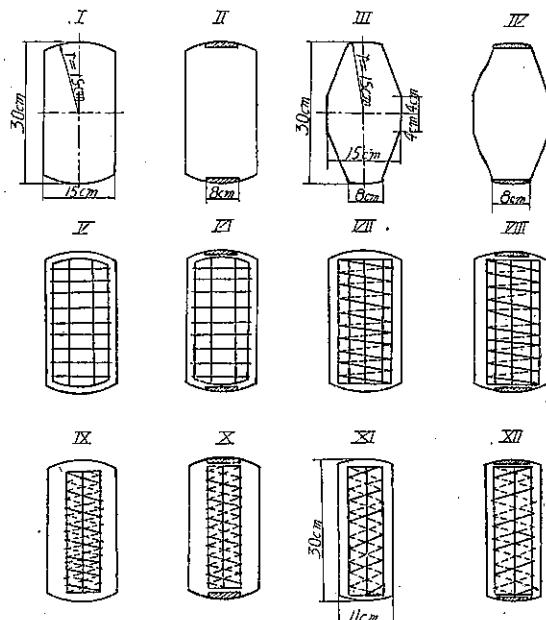
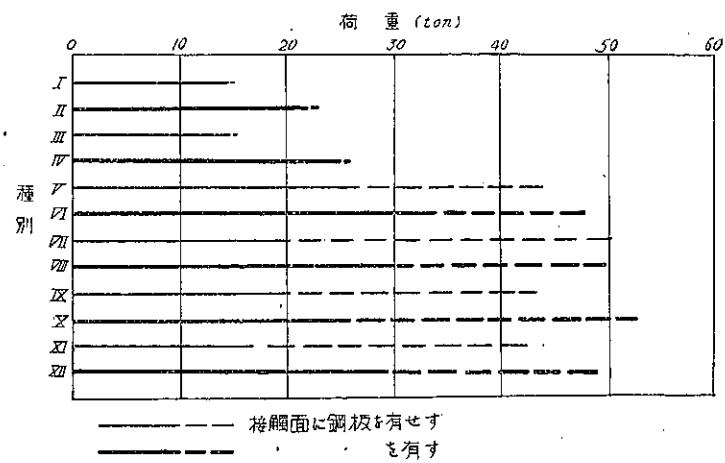


圖-17. 龜裂荷重及び破壊荷重



青線の終端にて初亀裂を生じ破線の終端にて  
破壊状態に達し荷重の上昇止む

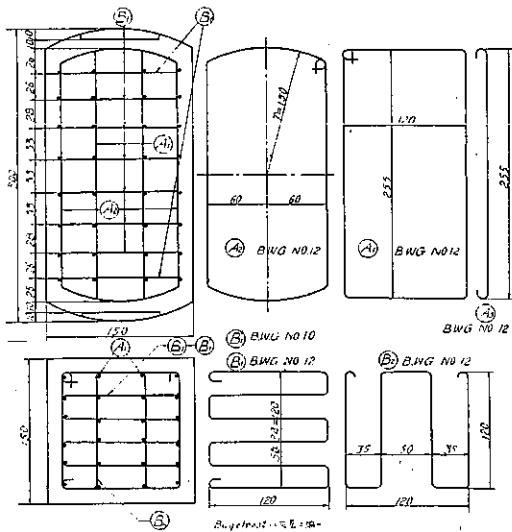
9) Gaede, "Wälzgelenke und Stelzenlager aus Eisenbeton". B. u. E., 1939. Heft 11.

裂荷重は 53%，破壊荷重は 51% 増加してゐる。之は承鉄の使用によつて、對稱断面に於ける横方向引張應力の最大値が減少して來るためである。尙承鉄の影響に就いては後に述べる。

さて配筋方法の影響に關しては、Bortsch の方法によつて、對稱断面に於ける水平方向の引張應力に十分抵抗し得るだけの鐵筋を Blügelrost として入れ、承鉄を取付けたもの即ち VI が最も良い結果を示した。螺旋鐵筋を用ひたものは、破壊荷重は非常に大であるが、破壊に達するかなり前に外側のコンクリートが剥落し、載荷點附近のコンクリートが壓挫されて使用に耐へない状態となるので、良否の判断は龜裂荷重と龜裂の進行状態及び破壊の状態によるべきであつて、この點より考へて VI が最もよいと判断されたのである。

VI は 5t に對して設計したもので、鐵筋の詳細は 図-18 の如くである。長さの方向及び軸方向の鐵筋は補助の鐵筋であつて、太い鐵筋を使用する必要はない。

図-18. 鐵筋詳細圖



#### 4. 接觸面附近に於けるコンクリートの許容支壓應力度並びに接觸面承鉄の影響

##### (1) 接觸面附近に於けるコンクリートの許容支壓應力度

橋承の接觸面即ち桁の下面及び橋臺又は橋脚の上面と接する轉動面には、厚さ 20 mm 程度の承鉄を使用するのが普通であるが、接觸面附近のコンクリートは非常に大きな支壓應力を受けることになる。併しこの様にコンクリート支承面が局部的に帶状の荷重を受ける場合には、支承面全體に荷重を受ける場合よりもコンクリートの許容支壓應力度を大きくとることが出来る。之は支壓材自身の強度の外に、支壓力を受ける面積  $A'$  と支承の表面積  $A$  との關係に依るものであつて、土木學會鐵筋コンクリート標準示方書では第 75 條(2)に於て、支壓材が帶状の荷重を受ける場合其の許容支壓應力度  $\sigma_{ca'}$  は  $\sigma_{ca'} = \sigma_{ca}^{3/2} / \sqrt{\frac{d}{d'}}$  に依ることを得、但し  $\sigma_{ca'}$  は  $120 \text{ kg/cm}^2$  を超過すべからず、と規定してゐる。茲に  $\sigma_{ca}$  は面全體に荷重を受ける場合の許容支壓應力度 ( $\sigma_{ca}$ )、 $d$  は支壓材の幅、 $d'$  は帶状の荷重の幅である。又この式の適用されるのは、支壓材の高さ  $h$  が幅  $d$  よりも大なる場合である。この規定は、Bauschinger, Bach 及び Graf の行つた試験結果を基として定められたものであるが、橋承の設計の際に、接觸面附近の應力度を  $120 \text{ kg/cm}^2$  以内とすることは甚だ困難であり、然も著者の壇に行つた現場より依頼の橋承供試體に就いての試験から見ても  $\sigma_{ca'}$  の限度を更に高め得るであらうことが、容易に豫想出来たのである。

以上の理由より、支承面が局部的に帶状の荷重を受ける場合の支壓應力度の許容し得る限度を明らかにせんがために、図-19 の如き幅及び長さ 30 cm, 高さ 36 cm の 1:2:4 コンクリート供試體に就き、荷重の幅を種々に變へて支壓力を試験した。使用コンクリートの壓縮強度は材齡 28 日にて平均  $280 \text{ kg/cm}^2$  である。

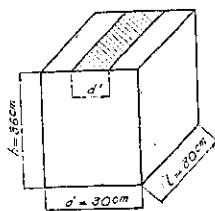
支壓力試験の結果は図-20 に示す如くである。何れも供試體 3 個に就いての平均をとつたものである。

之より實驗式を誘導するときは

$$K' = 0.90 K^{2.16} \sqrt{A/A'} = 1.28 \sigma_{ca}^{2.16} \sqrt{A/A'}$$

となる。但し  $\sigma_{ca}$  は局部的に荷重を受けた場合の支壓應力度、 $A$  は面全體に荷重を受けた場合の支壓應力度である。

図-19. 支壓力試験供試體の寸法



今之を鐵筋コンクリート標準示方書の規定と比較してみると、図-21 の如くである。(1) は試験結果を示す直線である。 $\sigma_{as}$  を標準示方書に於て取扱つてゐる最大値  $210 \text{ kg/cm}^2$  とすれば、示方書の規定は(2) なる直線で

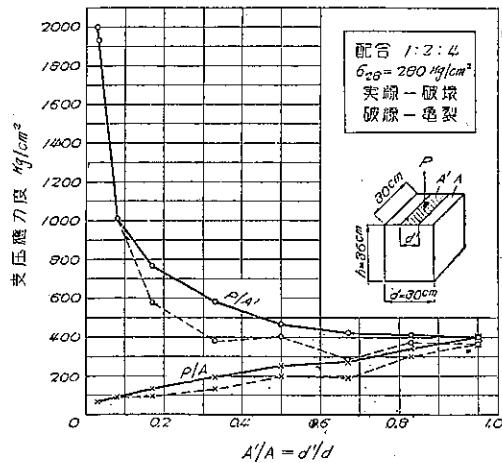
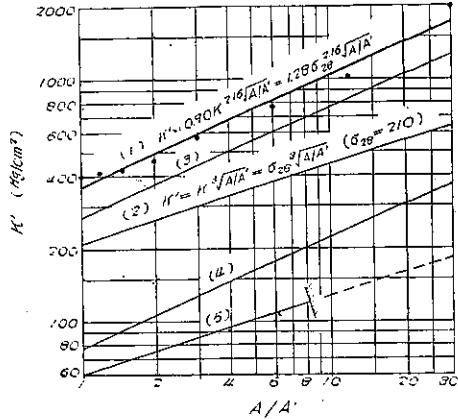
図-20.  $A'/A=d'/d$  と  $P/A$  及び  $P/A'$  との関係

図-21. 示方書規定と試験結果との比較



示される。(3) は同じく  $\sigma_{as}=210 \text{ kg/cm}^2$  として、試験結果より得た関係式を適用した場合の直線である。(2) と(3) とを比較するに(3)の方が(2)よりも  $K'$  の値が大で、この  $K'$  の差は  $A/A'$  の大となるにつれて増加してゐる。又(4)及び(5)なる直線は夫々(3)及び(2)に對して、3.5 の安全率をとつた許容支圧應力度を示す。(5) は  $\sigma_{ca'}=120 \text{ kg/cm}^2$  まで、即ち  $A/A'=8$  までしか適用し得ないものとなつてゐるが、(4) は試験範囲  $A/A'=1 \sim 30$  の全體に亘つて成立し、その最大値は  $\sigma_{ca'}=367 \text{ kg/cm}^2$  を示しており、許容支圧應力度  $\sigma_{ca'}$  の限度を現在の規定よりも更に高め得ることを示してゐる。

次に上述の實験式に於ける係数 1.28 は、支壓材の大きさ、寸法等によつて異なり、主として支壓材の高さの影響を受ける係数であるから、安全側にとつて之を 1 とし、又指數を安全側に變へて、許容支圧應力度式として

$$\sigma_{ca'} = \sigma_{ca} \sqrt[2.2]{A/A'} = \sigma_{ca} \sqrt[2.2]{d/d'}$$

とした。この式を  $\sigma_{as}=210 \text{ kg/cm}^2$  として示方書の規定と比較するときは図-22 の如くである。又  $\sigma_{ca'}$  の最大限度に就いては  $A/A'=d/d'$  の範囲を試験範囲 30 までとすれば  $\sigma_{ca'} \leq 280 \text{ kg/cm}^2$  となる。図-22 に於ける  $\sigma_{ca'} = \sigma_{ca} \sqrt[1.8]{A/A'}$  なる直線は参考のため之と同時に行つた點状の荷重に對するものである。

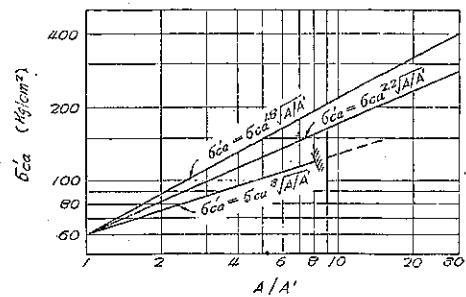
この試験によつて、 $\sigma_{ca'} = \sigma_{ca} \sqrt[2.2]{d/d'}$ 、 $\sigma_{ca'} \leq 280 \text{ kg/cm}^2$  が得られたが、この  $\sigma_{ca'}$  の限界値は標準示方書に於て取扱はれてゐる 1:2:4 程度のコンクリートで、 $\sigma_{as}=210 \text{ kg/cm}^2$  なる強度を有するものに對する値であつて、更に强度の大なるコンクリートに於ては技術者の判断によつて、限界値として更に大きな値をとることが出来る。この様に示方書の規定よりも大きな支圧應力度を許し得ることが明らかになつたので、橋承の設計は非常に樂になる。

更に上記の式の簡易計算式として次の式を導いた。

$$\sigma_{ca'} = 0.9 \sigma_{ca} \sqrt{\frac{d}{d'}}$$

この式による誤差は  $d/d'=2 \sim 10$  の範囲に於ては -7% ~ -0% に過ぎず、この程度の誤差は實際的には許容し得るので、この簡易式によつて計算して差支へない。

図-22. 善者の提案せる式と示方書規定との比較



## (2) 接触面承鉢の影響

前に述べた如く、高さ 30 cm の模型橋承供試體に就いての試験に於て、上下の接触面に承鉢を取付けることによつて強さは増加した。このことは現場より依頼の橋承供試體に就いても明らかに認められた。この様に強さの増加する原因是承鉢の使用によつて、荷重を幾らか廣い面積に分布して傳へるために、對稱断面に於ける横方向引張應力の最大値が減少して來るためである。又承鉢の使用によつて、桁の下面或は橋臺、橋脚の上面と橋承との接觸が良好になり、從つて應力が局部的に集中されることを避け、且つ又載荷點附近のコンクリートに生ずる最大壓縮應力度も大いに減じ、その部分のコンクリートが壓迫されて橋承の轉動作用（この轉動角は極めて小なるものであるが）を害するのを、ある程度まで防ぐことが出来る。

之等の理由より、橋承の接觸面と桁の下面或は橋臺、橋脚の橋承と接する上面とには承鉢を使用すべきであるが、この承鉢の厚さは、試験の結果より見てあまり大なる厚さは必要としない。普通に用ひられる橋承に對しては 20 mm 程度が適當であらう。あまり厚い承鉢を使用することは、従来の鋼構造に代つて鐵筋コンクリート橋承を使用せんとする本來の主旨に反するものである。又その幅は橋承の幅の約 1/2 位で十分である。

尚、承鉢の影響に就いては、獨逸の Burkhardt の行つた實驗に於ても、破壊荷重を 40% 高め得たと報告されてゐる。

## 5. 試験橋承の設計並びに其の設計荷重に對する安全率

前述の模型試験の結果を實際に應用して、荷重 100 t に耐ふべき鐵筋コンクリート橋承を設計し、之に對し供試體を 2 個製作して載荷試験を行ひ、その結果設計荷重に對し十分なる安全率を有することを見出し、模型試験の結果を實證したのである。供試體 2 個の内 1 個の接觸面承鉢の影響を見んがために承鉢を省略して製作せるものである。

### (1) 設計計

#### 1. 設計荷重並びに橋承の形狀及び寸法

設計荷重は 100 t、形狀及び寸法は圖-23 に示す如く、高 90 cm、幅 40 cm、長 60 cm とし兩端面は高さの 1/2 に中心を有する圓弧とした。後に鐵筋の計算に於て述べる如く、この寸法とすれば最大引張應力度は 21.25 kg/cm<sup>2</sup> となり、適當であることが認められた。

#### 2. 兩端接觸面承鉢

幅 20 cm、長 60 cm、厚 20 mm の鋼鉢を表面半径 45 cm に曲げて使用することとした。

桁の下面及び橋脚上面にも鋼鉢を使用する爲、今 Hertz の式によつて接觸面幅を求めるときの如くになる（圖-42）。但し鉢に接する部分のコンクリートは便宜上鋼と同じ變形をなすものと見做して計算する。

$$b = 4 \sqrt{\frac{2P}{\pi l E} \cdot \frac{1 - \frac{1}{m^2}}{\frac{1}{r_1} + \frac{1}{r_2}}}$$

$P = 100000 \text{ kg}$ ,  $l = 60 \text{ cm}$ ,  $E = 2100000 \text{ kg/cm}^2$ ,  $m = 3$ ,  $r_1 = 45 \text{ cm}$ ,  $r_2 = \infty$  を入れば

$$l = 5.7 \text{ mm}$$

圖-23. 試験橋承の形狀及び寸法

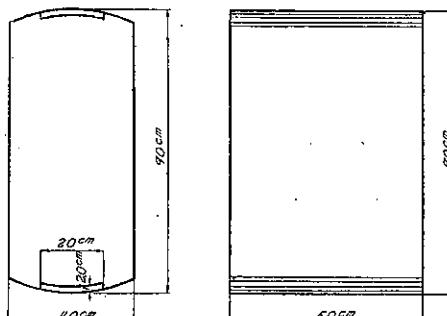
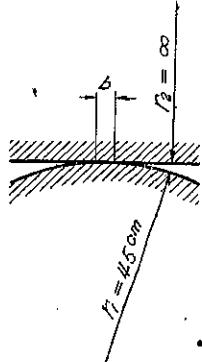


圖-24. 接觸狀態



次に応力の分布を Hertz の假定した如く、抛物線法に分布するものとして接觸面に於ける最大圧縮應力度を求むれば

$$\sigma_{\max} = \frac{4P}{\pi bl}$$

$$= 3738 \text{ kg/cm}^2$$

鋼に對しては、かかる場合に  $5000 \sim 6000 \text{ kg/cm}^2$  の圧縮應力度を許容し得る。且つ又、實際には承鉄に接する部分のコンクリートが鋼よりも大なる變形を生ずるために、接觸面幅  $b$  は計算によるものよりも大となり、從つて  $\sigma_{\max}$  は小となるものと考へられる。

### 3. 承鉄に接する部分のコンクリートに生ずる最大圧縮應力度

荷重が承鉄によつて、承鉄に接するコンクリートの幅  $12 \text{ cm}$  ( $40 \text{ cm} \times 0.3$ ) の面に Bortsch の假定せる如く、 $\cos$  狀に分布するものと假定すれば、コンクリートに生ずる最大圧縮應力度は

$$p_1 = \frac{\pi P}{2bl}$$

$$= 218 \text{ kg/cm}^2$$

となる。

$\cosine$  狀の分布であるから、 $d/d' = 8$  (即ち  $d' = 5 \text{ cm}$ ) と假定し、又コンクリートの配合をよくして  $\sigma_{\alpha} = 70 \text{ kg/cm}^2$  ( $\sigma_{28} = 245 \text{ kg/cm}^2$ ) ととれば、コンクリートの許容支壓應力度は前述の簡易式より

$$\sigma_{\alpha'} = 0.9\sigma_{\alpha} \sqrt{\frac{d}{d'}}$$

$$= 190 \text{ kg/cm}^2$$

となるが、鐵筋の使用により 15% 高まるものとすれば  $220 \text{ kg/cm}^2$  まで許容される。

### 4. 鐵筋の配置

鐵筋の配置は Bortsch の方法によつて決定する。

$$\beta = \frac{b}{a} = \frac{12}{40} = 0.3$$

$$\frac{y_0}{a} = \frac{\beta}{4} [5 - 13\beta]$$

$$= \frac{0.3}{4} [5 - 13 \times 0.3] = 0.0825$$

$$(0.60 - 0.9\beta + 2\beta^2) \frac{P}{a}$$

$$= (0.60 - 0.9 \times 0.3 + 2 \times 0.3^2) \frac{P}{a}$$

$$= 0.51 \frac{P}{a}$$

又  $P = \frac{100000}{60} = 1667 \text{ kg}$

(長 1cm 當り)

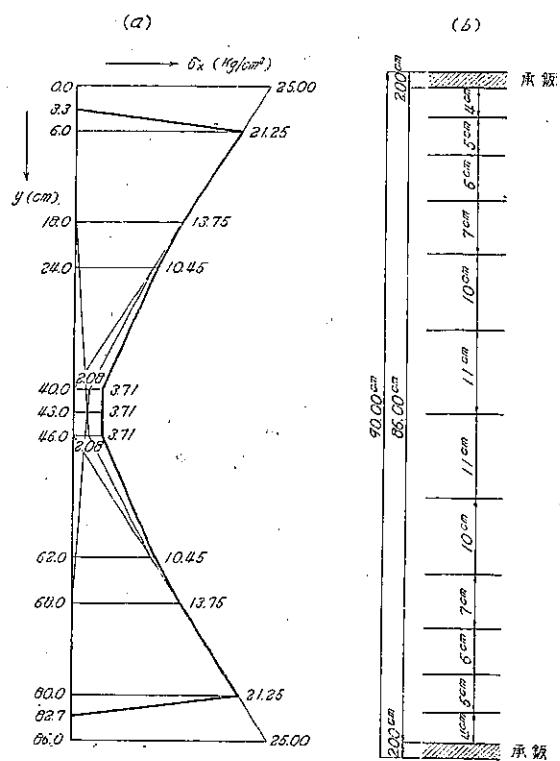
$$\frac{P}{a} = \frac{100000}{60 \times 40} = 41.67 \text{ kg/cm}$$

(長 1cm 當り)

故に引張應力の分布は圖-25 (a) の如くになる。

鐵筋は長さの方向に對し 10 cm 間隔に入れるものとする。

圖-25. 引張應力の分布並びに引張鐵筋間隔の決定



$e$  を高さの方向に於ける鐵筋の間隔、鐵筋断面積を  $A_s$ 、鐵筋の許容引張應力度を  $\sigma_{sa}=1000 \text{ kg/cm}^2$  とする。引張應力を全部鐵筋にとらせるのであるから

$$e \cdot 10\sigma_x = A_s \cdot \sigma_{sa}$$

$$e = \frac{A_s \cdot \sigma_{sa}}{10\sigma_x}$$

$\phi 12 \text{ mm}$  鐵筋を使用するときは

$$A_s = 1.131 \text{ cm}^2$$

$$\text{故に } e = \frac{1.131 \times 1000}{10\sigma_x}$$

$$= \frac{113.10}{\sigma_x}$$

之より  $\sigma_x$  の種々なる値に對し、鐵筋の間隔  $e$  を求むれば表-1 の如くになる。

表-1. 引張鐵筋の間隔

$\sigma_x (\text{kg/cm}^2)$	$e (\text{cm})$	$\sigma_x (\text{kg/cm}^2)$	$e (\text{cm})$
21.25	5.3	10	11.3
20	5.7	8	14.1
19	6.0	6	18.9
18	6.3	4	28.3
16	7.1	2	56.6
14	8.1	0	$\infty$
12	9.4		

之より高さの方向に於ける鐵筋の間隔を圖-25 (b) の如く決定する。

軸方向及び長さの方向の鐵筋も同じく  $\phi 12 \text{ mm}$  を使用する。

### 5. コンクリート

コンクリートの配合は容積比にて 1:1.5:3 とし、スランプ 5~7 cm を標準とする。砂利は 25 mm 以下、良質にして細粗粒適度に混合せるものを使用する。

コンクリートの填充に當つては、締固めを特に入念に行ひ、空隙の發生を防ぐ。

セメントは新鮮なものを使用する。

その他のコンクリートの強度に影響を及ぼす諸因子を考慮し、出来るだけ強度の大なるコンクリートを造る。

### 6. 設計圖

以上により設計したる橋承構造圖は圖-26 に示す如くである。

#### (2) 供試體の製作及び養生

供試體の製作は昭和 14 年 10 月 6 日某工事現場に於て行つた。

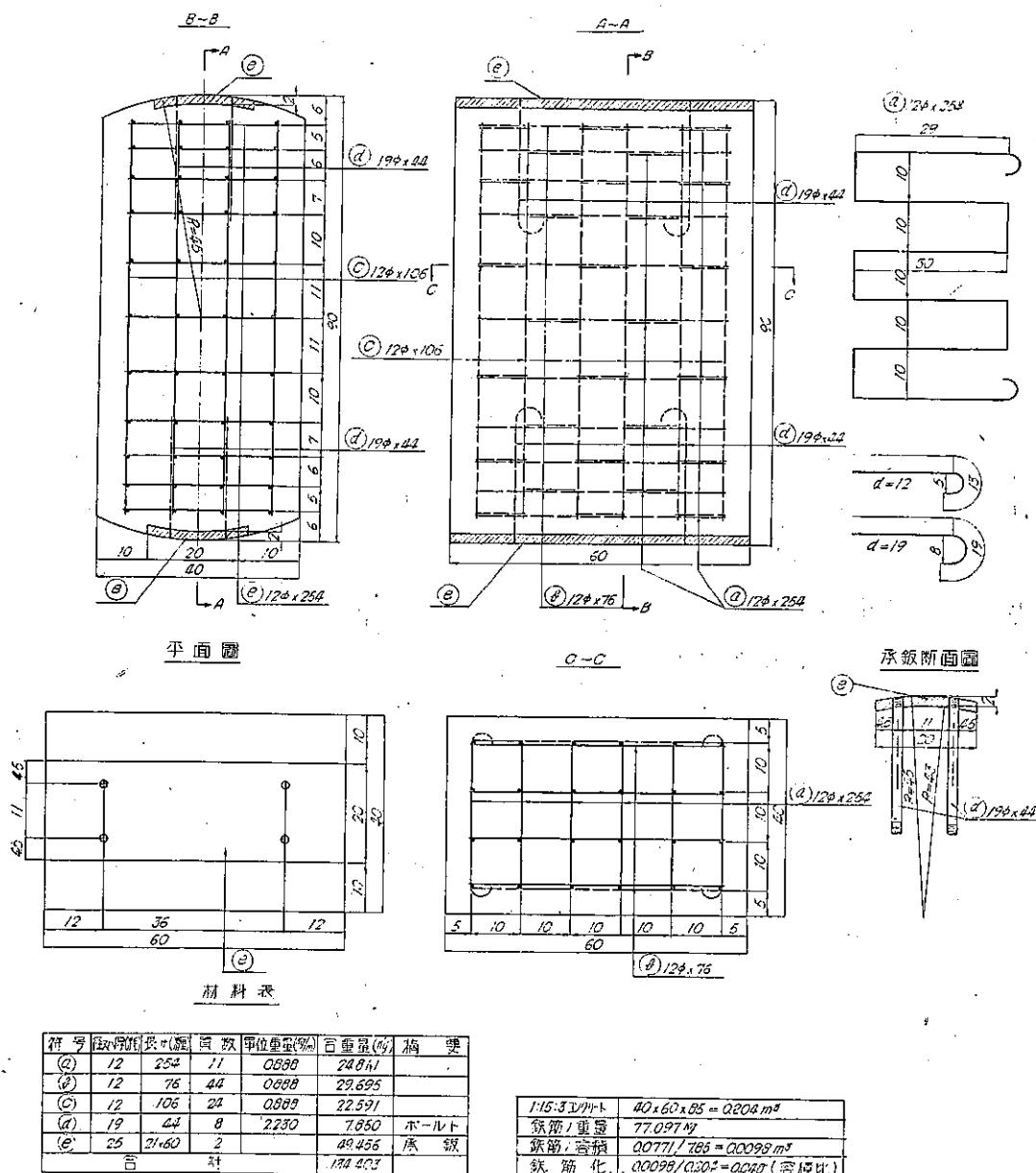
#### 1. 使用料材

セメントは三河セメント、砂は愛知縣矢作川産 2.5 mm 以下、比重 2.61、単位容積重量 1500 kg/m<sup>3</sup>、空隙率 42.5%、粗粒率 2.73 のもの、砂利は三重縣富川産 25 mm 以下、比重 2.62、単位容積重量 1673 kg/m<sup>3</sup>、空隙率 36.2%、粗粒率 6.91 のものを使用した。

#### 2. 混合

7 切練りバッヂミキサを使用し 2 練りに分けて練つた。配合は容積比にて 1:1.5:3、水セメント比はスランプ 5~7 cm を標準として  $w/c=50\%$  とした (混和水の溫度 22°C)。

### 圖-26. 試驗機承構造圖



### 3. 填充

両端接觸面が鉛直に立つ如く型枠を組立て、特に両端接觸面に偏倚を生ぜざる様十分注意した。鐵筋が非常に複雑してゐるので、コンクリートを數層に分つて填充し、直徑 12 mm 及び 6 mm の鐵棒にて十分突固めを行ふと同時に、型枠外部より Viber Co. A 型振動機を併用して、鐵筋の周囲、型枠の隅々までコンクリートの行き至りを良好ならしめた。

尙コンクリート填充の際、同一試料より圧縮強度試験標準供試體を 6 個製作した。

4. 養 生

コンクリート填充後、湿筵を以て被覆し、隨時撒水して常に濕潤状態を保たしめ、2週間後側面の型枠のみを除去し、その後も同様な養生を続けた。3週間後試験所実験室内に搬入したが、その後も材齟5週に至るまで常に湿

潤状態に保つて養生を續けた。

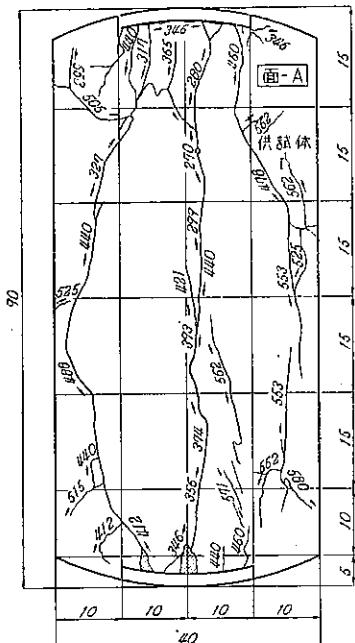
### (3) 載荷試験

試験機は M. A. N. 1000 t 圧縮試験機を使用し、供試體の軸を完全に鉛直に保つて漸次荷重を増し、各面に於ける初亀裂の発生並びに亀裂進行状態を観察しつゝ、破壊状態に達して荷重の上昇が止むまで載荷を續けた。

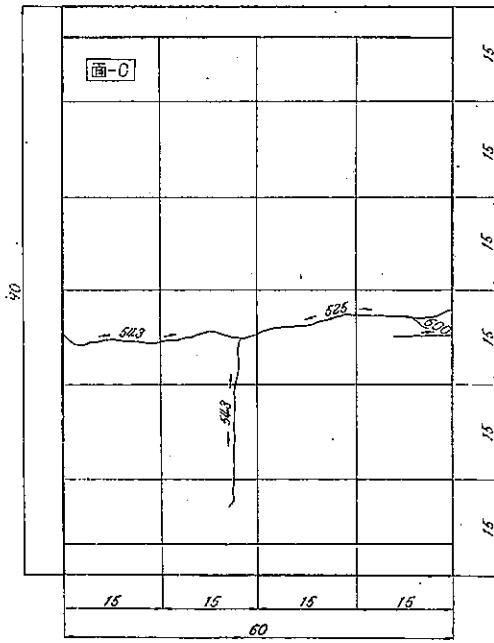
尚、設計荷重に対する安全率の基準となるべき荷重を見出さんために、撓み測定器 (Rectus, 1/100 mm 讀

図-27. 供試體 I の亀裂状態

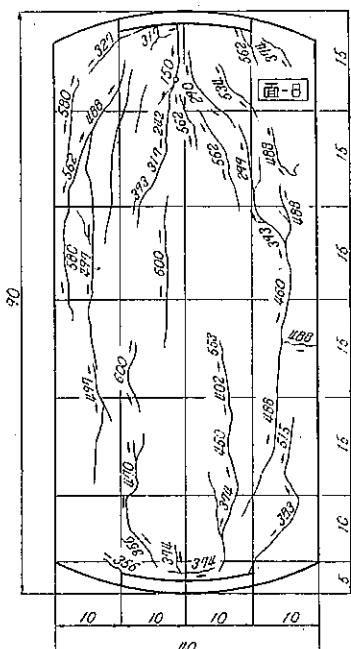
(a)



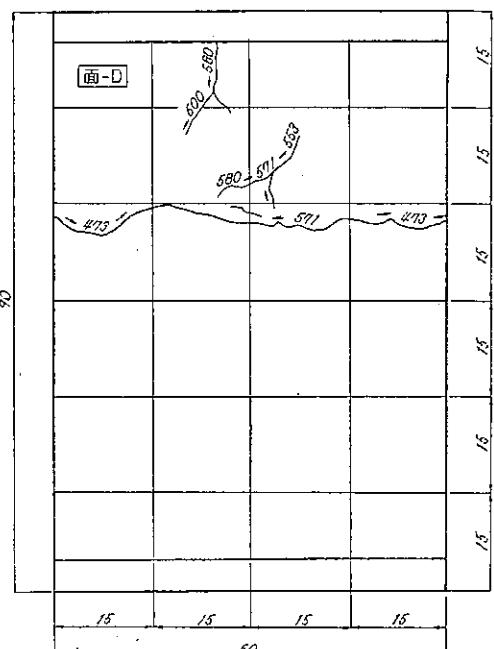
(c)



(b)



(d)



み)を取付けて、荷重に応ずる供試體の對稱斷面に於ける鉛直、水平兩方向の總變形量を測定した。

供試體コンクリート填充の際製作した壓縮強度試験標準供試體(直徑 15 cm, 高 30 cm)は、材齡 66 日にて平均強度  $337 \text{ kg/cm}^2$  を示した。

橋承の各供試體に就き載荷試験を行つた結果は次の如くである。

### 1. 供 試 體 I

材齡 68 日にて試験した。

A 面(コンクリート填充の際の上面)にては 270 t, B 面(コンクリート填充の際の下面)にては 150 t にて毛状龜裂を認めた。その後の龜裂進行状態は図-27 に示す如くである。破壊荷重は 603 t であつた。

荷重と對稱斷面に於ける鉛直、水平兩方向の總變形量との関係は図-28 の如くである。之より見るに、約 490 t にて變形量が急激に増大してゐる。

寫真-3 に載荷前の供試體、寫真-4 は破壊後の状態である。

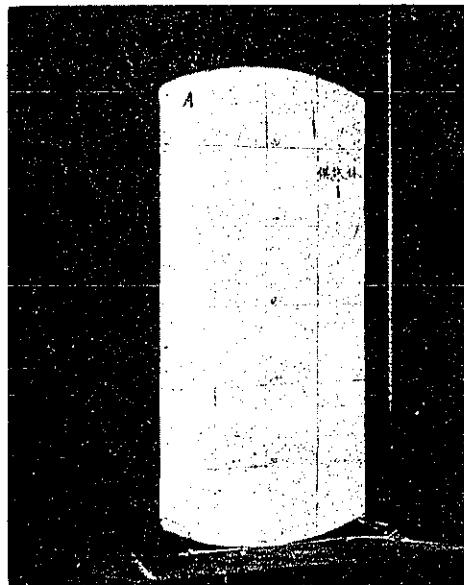
### 2. 供 試 體 II

供試體 II は接觸面に承釣を有しないものである。材齡 69 日にて試験した。

A 面(コンクリート填充の際の上面), B 面(コンクリート填充の際の下面)共に 233 t にて毛状龜裂を生じた。その後の龜裂進行状態は図-29 に示す如くで、破壊荷重は 563 t であつた。

荷重と對稱斷面に於ける鉛直、水平兩方向の總變形量との関係は図-30 に示す如くで、水平方向の變形は測定器の故障のため途中までしか測れなかつたが、約 400 t にて變形量が急激に増大するのを認めた。

寫真-3. 載荷前の供試體 I



寫真-4. 破壊後の供試體 I

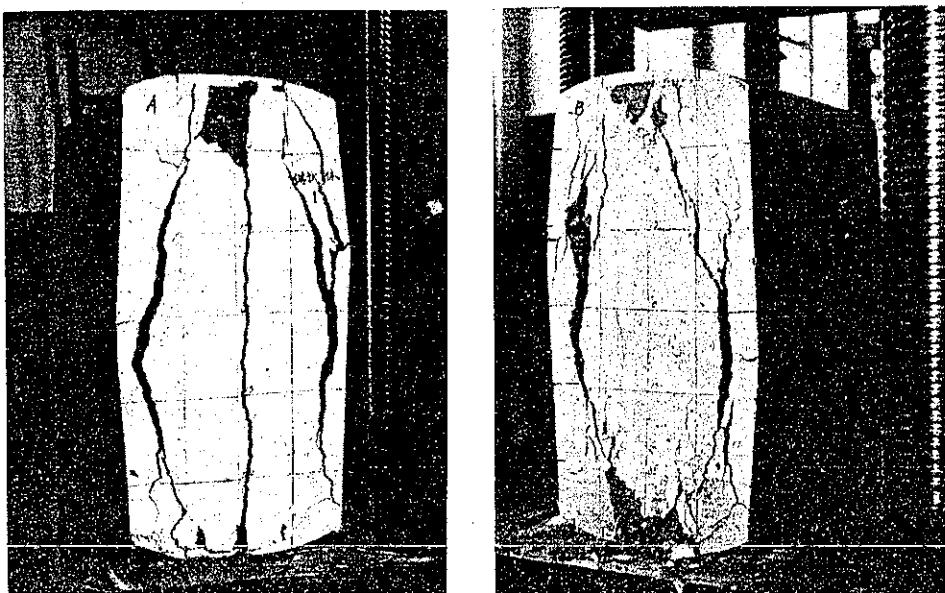
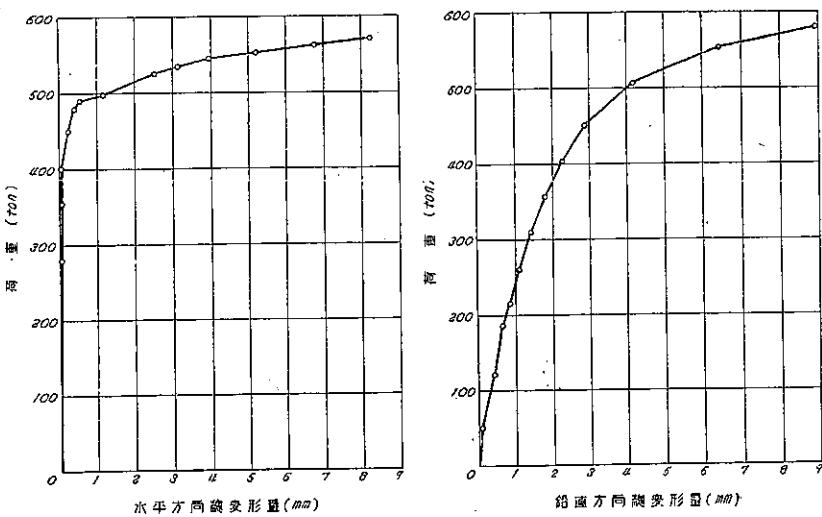


図-28. 供試體 I に於ける荷重と總變形量との關係



寫真-5 は載荷前の供試體、写真-6 は破壊後の状態である。

#### (4) 設計荷重に対する安全率

載荷試験結果より、亀裂荷重及び破壊荷重、並びに之等の設計荷重 100 t に対する倍率を示せば表-2 の如くである。

表-2. 亀裂荷重及び破壊荷重並びに之等の設計荷重に対する倍率

供試體	面	亀裂荷重 (t)	倍率	破壊荷重 (t)	倍率
I	A	270	2.7	603	6.0
	B	150	1.5		
II	A	233	2.8	563	5.6
	B	233	2.3		

併しながら、橋承の安全率は勿論亀裂荷重を基準とすべきものでなく、又破壊荷重を基準とすべきものでもなく、安全率の基準としては、変形量の急激に増大するときの荷重をとるのが妥當であると考える。

今この変形量の急激に増大せるときの荷重を基準として安全率を求めるときは表-3 の如くになる。又その荷重の際の總変形量は表-3 の右の欄の如くである。

即ち何れも設計荷重に對し 4.0 以上の安全率を有してゐるが、I は II より 23% 大なる安全率を有してゐる。

#### (5) 接觸面承鉄の影響

I と II (I は承鉄を有するもの、II は承鉄を有せざるもの) を比較してみると、I は II に比し亀裂荷重は増大してゐないが、破壊荷重は僅か増大してゐる。亀裂荷重が増大してゐないのは、II の方が I よりもコンクリート填充の際、接觸面に近い部分のコンクリートの突固めが容易に行ひ得たことによるのである。

併し、変形量が急激に増大せるときの荷重即ち安全率の基準と考へらるべき荷重に就いて比較してみると、I は II よりも 2.3% の増加を示してゐる。又図-28 と図-30 を比較するに、同じ荷重に對して II は I よりも鉛直方向の總変形量が非常に大である。例へば、荷重 300 t の際に、I では 1.4 mm であるのに對して II では 2.3 mm、荷重 400 t のとき I では 2.3 mm であるが II では 3.6 mm となつてゐる。

表-3. 設計荷重に対する安全率

供試體	變形量が急激に増大せるときの荷重(t)	安全率	總變形量(mm)	
			鉛直	水平
I	490	4.9	3.8	0.5
II	400	4.0	3.6	0.1

圖-29. 供試體 II の 龟裂 狀 態

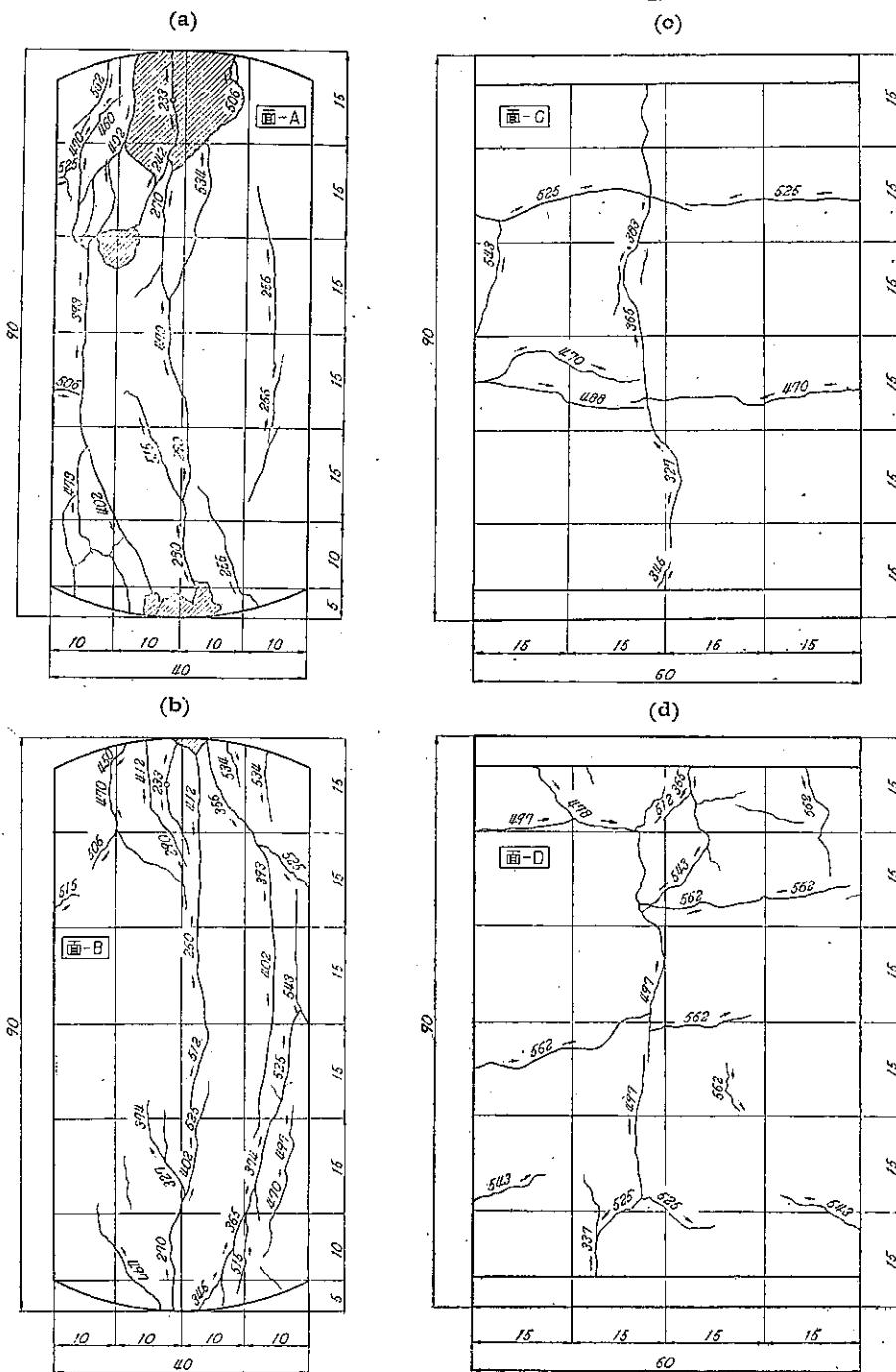


写真-5. 載荷前の供試體 II

図-30. 供試體 II に於ける荷重と總變形量との關係

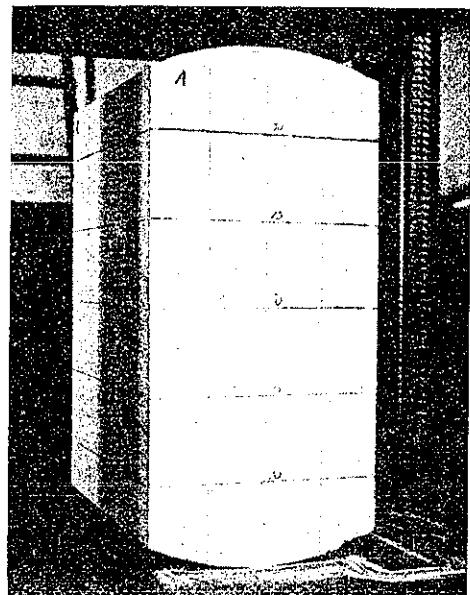
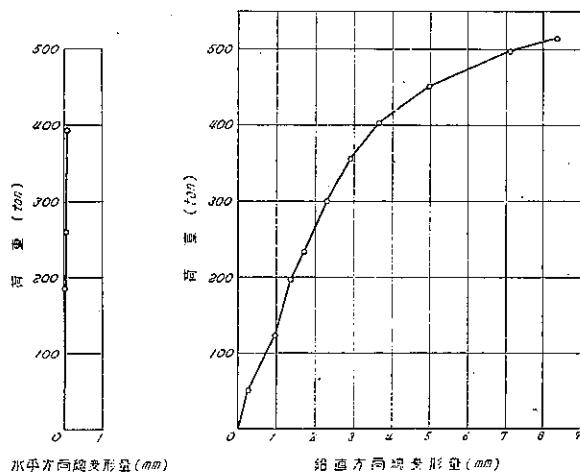
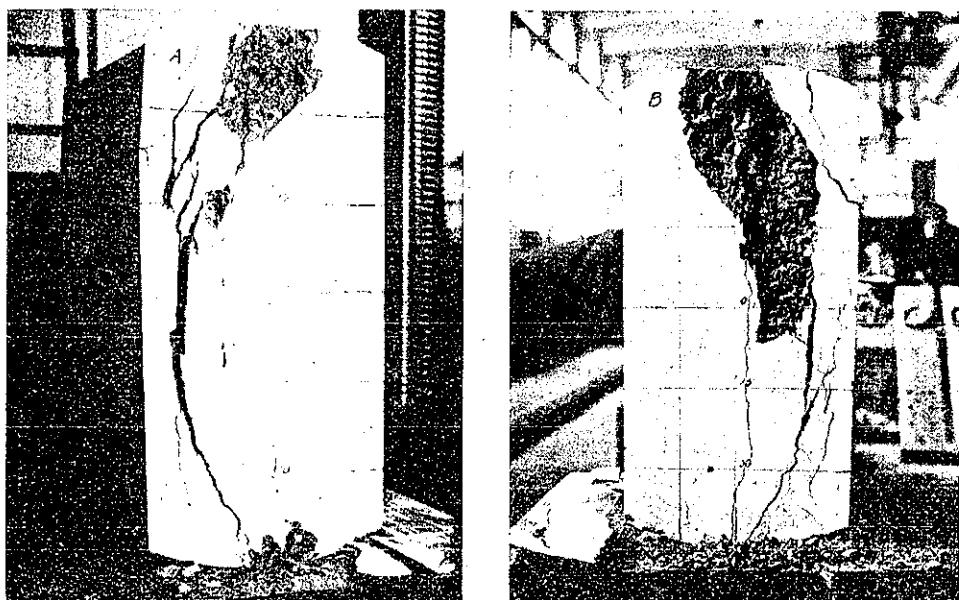


写真-6. 破壊後の供試體 II



之は、接觸面に承鉄を使用しない場合には、接觸面附近のコンクリートが、承鉄を使用する場合よりも大きな歯性を蒙るためである。

以上の如く接觸面の承鉄は、安全率を高め、変形量を減ずるものであるから、接觸面には承鉄を使用すべきである。

#### (6) 試験結果の要約

上記試験の結果を要約すれば次の如くである。

1. Bortsch の方法によつて水平方向引張織筋を Bügel 形に挿入せる鐵筋コンクリート橋承は、製作に十分の注意を拂へば、十分なる強さを有するものである。之によつて筆に行つた模型試験の結果が實證された。
2. 安全率の基準としては、對稱斷面に於ける總變形量が急激に増大するときの荷重をとるのが妥當であると

考へ、荷重に応ずる鉛直水平両方向の總變形量を測定したが、之を基準として求めた安全率は、I では 4.9、II では 4.0 であつた。

3. 接觸面承鉄の影響について I と II とを比較するに、承鉄の使用によつて安全率は 23% の増加を示してゐる。又承鉄は接觸面附近のコンクリートの壓挫を防ぎ、從つて變形量を減ずる。かゝる理由より、接觸面には承鉄を使用すべきである。

尙この設計に於ては Bortsch の方法による水平方向引張應力度の最大値を  $21.25 \text{ kg/cm}^2$  に止めたが、この値があまり大きくなるときは、橋承の寸法を大にしてこの値を減じなければならない。

## 6. 結 言

鉄筋コンクリート橋承は適當なる設計施工によつて十分なる強さを有せしむることが出來、強さの點から云つて從來の鋼構造に十分代用せしめ得るが、又工費の點からも頗る經濟的である。即ち工費は 1 個當り約 100 圓程度で出來、工費は約  $1/4 \sim 1/5$  に減ぜられる。

この様に、鐵筋コンクリート橋承は、十分なる強さを有し、又工費も遙かに少くてよいのであるから、鋼構造に對する代用として考へるよりも、むしろ當然使用ざるべきものであると考ふべきである。

轉動作用に對する抵抗力に就いては、今後試験研究を進める豫定であるが、モーメントの臂長が長いから、むしろ鋼構造よりも有利ではないかと考へる。

本研究に依つて得られた、設計施工に當つての注意事項を要約するときは次の如くである。

1. 先づ與へられた荷重に對して形狀を決めなくてはならないが、形狀のあまり大に過ぎるものは自重が大となつて取扱ひにも不便であるから、なるべく小さなもので大きな強さを有するものが望ましい。併し、あまり小さすぎて鐵筋の間隔が密になりすぎてもいけないから、適當の大きさを見出すことが必要である。Bortsch の方法によつて計算する場合には、鐵筋の直徑、間隔等を考へて、最大引張應力度の値を大體  $25 \text{ kg/cm}^2$  位に抑へて形狀をきめれば適當であると思はれる。

2. 鐵筋の配置に就いては、横方向の引張應力に對して十分抵抗し得る如く鐵筋を配置すべきである。即ち設計に當つては、對稱斷面に於ける水平方向引張應力圖により、この全引張力を鐵筋によつてとらしむる様計算をなし、應力大なる個所は鐵筋間隔を密にし、應力小なる個所は疏とし、合理的な配筋方法を講ずべきである。Bortsch の方法に依る場合には、龜裂が入つた場合の鐵筋の受ける應力の増大を考慮に入れ、鐵筋の許容應力度を普通よりも小さくとつておくべきである。

3. 龜裂は無筋のものにあつては中央に生じ、鐵筋にて補強せるものにあつては中央に近い軸方向鐵筋に沿つて生ずる。從つて引張應力の最大なる對稱斷面に軸方向鐵筋をおくことは宜しくない。又軸方向鐵筋は補助の鐵筋であるから、太いものを使用する必要はない。

4. 應力の分布狀態及び龜裂狀態より明らかなる如く、橋承の龜裂發生は軸方向の壓縮によつて誘起される横方向の引張應力によつて生ずるものであるから、龜裂荷重を高め、又橋承の強さを増し耐久性を増すために、橋承用のコンクリートとしては、壓縮強度と共に引張強度の大なるものを使用すべきである。

5. 鐵筋の配置が相當複雑になつて、あまり硬練りのコンクリートを用ひることが困難であるから、1:1.5:3 程度の富配合のコンクリートを用ひ、突固めは入念に行ひ、出來得れば振動機を使用してコンクリート内の空隙を減少せしむべきである。

6. セメントは風化してゐない新鮮なものを用ひ、骨材の粒度も適當なものを選擇し、配合、混合、養生は特に入念に行はなければならない。

7. 接觸面承鉄はあまり厚いものは必要としないが、あまり薄すぎるもの、或は幅の狭すぎるものであつては效果がない。普通の橋承に對しては、幅が橋承の幅の約  $1/2$  程度で、厚さ 20 mm 程度の鋼板を曲げて取付ける

のが適當と考へる。

8. 接觸面承鉄は桁の荷重を直接受けて、之を橋承コンクリートにある程度分布して傳へるが故に、その表面仕上げは特に入念に行ひ、凹凸なく桁の下面接觸鉄或は橋臺、橋脚上の接觸鉄と全長に亘り一様に接觸し、荷重を平等に分布せしむる如くしなければならない。

9. 鉄はその表面仕上げのみならず、コンクリート施工の際、正規の位置を保たしむること困難で又鉄のねじれも生じ易く、然も鉄の偏倚が橋承の強さに及ぼす影響は頗る大きいから、コンクリート施工の際は、中心位置の偏倚とねじれを生じない様に、特に注意が肝要である。

このためには、型枠を横に組み両端の承鉄が鉛直に立つ位置において、コンクリートを打てば都合がよい。併しこの場合承鉄の長さがあまり長いと、接觸面の偏倚も大きくなり易く、従つて應力の分布が不均等になり龜裂を早く生ずることとなつて望ましくない。

10. 橋承と桁の下面又は橋臺、橋脚の上面とは柄によつて連結し、地震等の際、橋承が轉倒しない様な構造にしなければならない。

11. 橋承は橋臺或は橋脚の中に隠蔽されるものであるが、施工の際は橋承の下端まで橋臺或は橋脚のコンクリートを打ち、橋承を正規の位置におき、然して後に残りの兩側のコンクリートを打つ。兩側の壁と橋承の間には夫々 5 cm 位の間隔をおき、この中に填隙材を填充しない方がよい。

大體以上の通りであるが、之を要するに橋承の強さは、コンクリートの入念なる配合及び施工、鐵筋の合理的配置並びに接觸面承鉄をして正規の形狀及び位置を保たしむることにあるから、之等の諸點に十分注意して設計或は施工をなすべきである。